

キャサリン・マンズフィールド作

桃山まや訳

## ドイツの保養所で

In a German Pension, by Katherine Mansfield, Translated by Maya Momoyama

### 第十一話 進歩的なご夫人

「あの人も誘ってみましようよ」エルザがわたしの鏡の前で、ピンク色の飾り帯を結びなおしながら言った。「とても知的な人だけど、あの人には何か悲しい秘密があるように思えてならないの。リーザが今朝わたしの部屋にきて話してくれたんだけど、あの、何時間も一人きりで書き物をしているらしいわ。ほんとのところ、リーザはあの人が本を書いているって言うてたの。わたし達と付き合おうとしないのも、ご主人やお子さんをほったらかしにしているのも、きつとそのせいなんだわ」

「それなら、あなたが誘ってみたら」とわたしは言った。「わたしはまだ一度も話しをしたことがないもの」

エルザはぼつと赤くなり「わたしだって一度だけよ」と言った。「野原で摘んだ花をあの人の部屋まで持って行ってあげたことがあるの。そしたら白いガウン姿で髪も結わずにドアのところまで出てきたのよ。あのときは忘れないわ。あの人は花束を受け取っただけだったけれど。でもね、そのあとでわたし聞いちゃったのよ。だってドアがきちんと閉まっていなかったんだもの。廊下を引き返そうとしたら、『清纯、香り、清纯な香り、香りの清らかさ！』ってあの人が言っているのを。ねえ、素敵だと思わない！」

ちょうどその時、ケラーマン夫人がドアをノックした。

「支度はできましたか？」夫人は部屋に入るとわたし達を見て満足そうにうなずいた。「皆さん入口の上り段のところにおそろいよ。それから、あの進歩的な方もお誘いしましたからね」

「まあ、うれしい！」エルザはおもわず声を上げた。「わたしたちも今あの方のことを話していたところだったんです」

「そうでしたの。実はあの方がお部屋から出てこられるところにちょうど出くわしましたね、素敵な計画ですねっておっしゃったものだから。あの方もシュリンゲンにはいら

したことがないんですって。もう下に降りてエルカルト氏とお話をされているわ。きつと楽しい午後になりますよ」

「フリッツも待つてます？」エルザが聞いた。

「もちろんですとも　夕食の鐘を待つている腹へこさんみたいに、待ちかねてますよ」

エルザは部屋を飛び出していった。ケラーマン夫人はわたしの方を向いて意味ありげに笑った。夫人とわたしはこれまで親しく話をするような間柄ではなかった。というのも、夫人に「残されたたった一つの慰め」　　やんちゃなカール坊やが　　母性の炎をかきたてるような子供ではなかったからだ。まともな女ならだれしも、その心の祭壇にあふれるほどの母性をきらめかせているはずなのに。とはいえ、ピクニックのおかげで、お互いに打ち解けることができたのは喜ばしいことだった。

「わたし達には」ケラーマン夫人が言った。「別の楽しみもできましたね。エルザとフリッツの幸せな様子を見ることができるとも。なんでも昨日の朝、二人のご両親から結婚をお許しになる手紙が届いたそうですよ。婚約したばかりのカップルのそばにいと、こちらまでお花が咲いたような気分になるから不思議ね。変な話だけど、わたしは婚約したてのカップルに限らず、初めて赤ちゃんを産んだ人や、臨終を迎えた人のそばにいる時にも、似たような気分になるんですよ。それじゃ、みなさんのところへ行きましょうか」

人が臨終を迎えようとしている時に、どうしてお花が咲いたような気分になれるのだろう。わたしは夫人にそのわけを聞きたかったが、「ええ、参りましょう」と答えるだけにしておいた。

わたし達が入口の上り段の上に姿を現すと、ピクニックに参加する「保養客」たちの間から歓声があがった。それはドイツ風ののどかなピクニックのさきぶれとなった。エルカルト氏とわたしは、朝から一度も顔を合わせていなかったため、ペンションの流儀に従い、どのくらいお休みになりましたか、いい夢をご覧になりましたか、今朝は入れたてのコーヒーをお飲みになりましたか、午前中はどう過ごされましたか、などと交互にたずねあった。そして、ドイツ人的な律儀さで挨拶の階段を一段ずつ上り切ると、にっこり笑ってほっと息をついた。

「じつは」エルカルト氏が言った。「うれしいことに、こちらの教授夫人がわたし達のピクニックに参加されることになったんですよ。ではさっそく」エルカルト氏は満面に笑みを浮かべて進歩的な夫人に会釈した。「ご紹介いたしましょう」

わたしと進歩的なご夫人は丁寧にお辞儀をしながら、「驚」のような目でお互いを観察し合った。といっても、そのまなざしは人間の女特有のもので、鳥の目のように無邪気なものではなかった。

「あなたはイギリスの方ね？」進歩的なご夫人が言った。わたしはそつだと答えた。「今、イギリスの本をたくさん読んでおりますのよ　　研究しているといったほうがいいか

「もしれません」

「おやまあ」エルカルト氏が口を挟んだ。「驚きましたねえ、これはまたなんと偶然でしょう。このわたしも死ぬまでには必ず、シェークスピアを原文で読んでみようとか決めてるんですよ。するとなんですか、あなたはすでにイギリスの思想の泉にどっぷりと浸っておられるということですか」

「わたくしの読んだ限りでは」進歩的なご夫人が答えた。「それほど深い泉ではありませんけれど」

エルカルト氏は納得したようにうなずいた。

「そうでしょうとも」彼は続けた。「聞くところによりますと……いや、ピクニックに出かけようという時に、イギリスのお方の気分を損ねるような話もなんですから、続きはまたの機会ということに」

「みなさん、準備はいいですか？」フリッツがエルザの腕をとり、上り段の一番下からみんなに呼びかけた。カールがいないことに気づいたのは、そのすぐ後のことだった。「カール、カールちゃん！」わたし達は大声で呼んだ。しかし返事はなかった。

「ついさっきまでここにいたんだけどなあ」そう言ったのはランゲン氏だった。哲学に没頭しすぎてノイローゼになった若者だ。経過はいいようだが、いまだに顔色は悪い、やつれた感じは隠せなかった。「ここに座って、ヘアピンで時計の中から何かをほじくり出してしまいましたよ」

「まあ、止めてくださらなかつたんですか、ランゲンさん」ケラーマン夫人はランゲン氏に食ってかかった。

「ええ」とランゲン氏。「これまでにはやめさせようとしたこともありましたが、まあ腕白では手に負えませんよ、これをやったかと思つと、もう別のことをしているんですから！ ひよつとして、今ごろ食堂の時計に何か悪さをしているかもしれないよ」ランゲン氏はまるでそうあつてほしいというような口ぶりだった。

「子供なんかおいてさっさと出かけませんか」そう言ったのは進歩的なご夫人だった。「私は幼い娘を散歩に連れて行ったことなんかありませんよ。わたしが留守でも、ベッドルームでおとなしく待っていていられるようにきちんとしてつけてありますからね」

「あそこ　あそこにいる」エルザが甲高い声をあげた。カールが栗の木から滑り降りてくるのが見えた。小枝にとつては最悪だった。

「みんなが僕のことなんて言うか聞いてたんだよ、ママ」カールは、母親が服についたごみを払っている間じゅう言い訳をしていた。「ぼくは時計なんかいじってない、見てただけだよ。それに、あの女の子はベッドルームでじつとしてないよ。お留守番のときはキッチンに降りてきちゃうのよ、って言ったんだ。それに」

「もうお黙りなさい！」ケラーマン夫人が言った。

私たちは駅へと続く道を一かたまりになって歩いていった。汗ばむほど暖かな午後だった。どこの宿でも、「保養客」たちが食後の軽い運動をするために庭に姿を見せていた。

なかには「散歩ですか?」と声をかけてくる人たちもいたが、こちらがシュリンゲンまで行くと言つと、「おやまあ」といった表情を隠しもせず、「せいぜい楽しんでいらつしやい」と返してくるのだった。

「だが八キロはあるよ」白いひげをはやした老人が大声で言った。柵に寄りかかって、黄色いハンカチで顔をあおいでいる。

「七キロ半です」エルハルト氏がとつさに言いかえた。

「八キロだ」賢人面の老人がまた怒鳴った。

「七キロ半です!」

「八キロだ!」

「ありや正気じゃないな」エルハルト氏が言った。

「好きに言わせておけばいいじゃありませんか!」わたしはそう言いながら両手で耳をふさいだ。

「間違いをほつておくわけにはいかんです」エルハルト氏はわたしたちに背を向けると、怒鳴るかわりに、老人に向かって指を七本と半分あげて見せた。

「八キロだ!」白髭の老人は相変わらず威勢のいい声でわめいていた。

わたしたちはすっかり白けた気分になり、白い道標に行きあたるまで立ち直ることができなかつた。道標には、「この道をはなれて野原の小道を行きなさい なるべく芝生を踏みつけないように」と書いてあつた。別の言い方をすれば、一列に並んで歩きなさいということだ。フリッツとエルザには気の毒な話だつた。カールは子供らしく、先頭に飛び出してゆき、母親から借りたパラソルの柄で手当たりしだいに花をなぎ倒して進んだ。その後三人 わたし そしてエルザとフリッツが続いた。わたしの位置には、前の三人の会話に加え、恋人たちのささやき声まで聞こえるというおまけがついていた。

「僕のこと愛してるかい?」とフリッツ。

「ええ もちろんよ」とエルザ。

フリッツはさらに熱を込めて「どのくらい?」

エルザはその問いには答えずこつ切り返す。「あなたこそわたしのことどれくらい愛してるの?」

するとフリッツがエルザの仕掛けた罪のない罠をかわして「僕の方が先だよ」

なんだかわけがわからなくなつてきたので、わたしはケラーマン夫人の前にすべり込み 夫人の楽しそうな様子に気を取り直して歩き続けた。わたしには最愛の人に愛情の量を知らせる必要がないこともありがたかつた。「それにしても、両親から結婚を祝福する手紙が届いた翌日に、どつしてお互いの愛を確かめ合わなければならぬのだろつ」わたしは考えこんでしまった。「いったい何のために? 婚約して結婚を待つばかりの二人にとって、愛ほど確かなものはないはずなのに そんなことは、もっと年をとつてからにしてもらいたい」

野原の果てがひだのようになって松の森の中に切れ込んでいた。森の中はひんやりしていて気持ちが悪くさそうだった。ここにも道標が立っていて、広い道を行けばシリゲンへ出ます、紙くずや果物の皮はベンチに備え付けてある金網のくずかごに入れてください、と書いてあった。私達は一番近くのベンチに腰を下ろした。カールはめすらしそつにくずかごの中をかき回していた。

「森はいいわ」進歩的なご夫人が物憂げな笑みを浮かべてつぶやいた。「森の中にいると、髪の毛がもぞもぞしてきて、眠っていた野性が目覚めるような気がするわ」

「早い話が」ケラーマン夫人は少し考えてから続けた。「森に漂う松の木の成分ほど頭皮にいいものはないってことでしょ」

「もうケラーマン夫人ったら、せつかくの気分が台無しだわ」とエルザが言った。

進歩的なご夫人はもつともだといった顔でエルザを見ると、「あなたも自然のなかに神秘的な心を感じたことあるのね?」と問いかけた。

そこでランゲン氏の出番となった。「自然に心なんかありませんよ」ランゲン氏は何のためらいもなくぴしゃりと言つてのけた。食べることも忘れて、ひたすら哲学に打ち込んできた彼らしい態度だった。「自然は破壊するために創造しているんです。食べては吐き、それをまた食べるといった具合にね。だから、自然に踏みつけられながら、かろつじて生きている僕たちには、この世は狂っているとしか思えないし、創造という営みなど俗悪極まりないものには見えません」

「ねえ君」エルカルト氏が口をはさんだ。「君はまだ人生のなんたるかを知らないようだね!」

「失礼ですが　なんでそんなことがわかるんです?」

「今のお話を聞いたからですよ。もう議論はおしまいにしましよ。十年経ったらまたこのベンチに座つて、今おつしゃつたことを繰り返してみるといいわ」ケラーマン夫人が言った。その目はフリッツに向けられていた。彼は人目もはばからず、夢中になってエルザの指を数えていた。「その時は奥様をつれてくるんですよ、ランゲンさん。そしてご自分のお子さんの遊ぶ姿をご覧になるのね」ケラーマン夫人はカールに目をやった。カールはくずかごから挿絵入りの新聞紙を引っ張り出し、胸を美しくより豊かにするために、という宣伝文句を一字ずつ読んでいた。

カールが宣伝文句を読み終わらないうちに、わたし達は出発することになった。森が深まるにつれ、わたしたちの気分は高まっていった。三人の男たちは「おお、世界よ、どうしてそんなに素晴らしいんだ!」と歌いだしていた。耳障りな声で一番下のパートをつたっているのはランゲン氏だった。自分勝手な「世界観」で、歌詞に皮肉を込めようとしたがだめだった。三人の男たちは、わたし達のことなど忘れたようにどんどん進んでいった。楽しそつに、夢中になって。

「そうだわ、ちょうどいい機会だから」ケラーマン夫人が口を切つた。「教授夫人、今あなたがお書きになっているご本のことを少しお話ししてくださらない」

「まあ、どつしてわたしの本を書いていることをご存知なんですか？」進歩的なご夫人が驚いたような声を上げた。

「ここにいるエルザがリーザから聞いたそうですよ。わたしはまだ本を書いている女性とじかにお話しをしたことがないもんですからね、話の種をどうやって探しているらっしゃるのかと思つて」

「それで苦労したことはありませんの」進歩的なご夫人が言った　ご夫人はエルザの腕を取つて静かにもたれかかった。「どこでやめるかを決めるほうが大変なんですよ。

何年ものあいだ頭のなかでもやもやしていたものが、三ヶ月ほど前に堰を切つたように溢れ出してきましたね。次々と新しい発想が生まれては、翼をはばたかせてせつつくもんですから、寝る間も惜しんで書いています」

「それは小説？」エルザがはずかしそうに聞いた。

「小説に決まつてるわ」とわたしは言った。

「またずいぶんはつきりおっしゃるじゃないの」ケラーマン夫人が真顔でわたしを見つめた。

「だつて、小説でなければそんなことが起きるはずありませんもの」

「まあまあそう向きにならなくても」進歩的なご夫人が宥めるように言った。「おっしゃるとおりよ、小説ですよ　新しいタイプの女性を題材にした。ようやく女が物を言える時代になりましたからね。神秘的というか、ほとんど予言的な作品です。進歩的な女性の理想の姿を描いているんです。もちろん進歩的といつても、どこかにいる過激な人たちのことを言っているわけではありませんよ。女であることを否定して、自分たちのひ弱な翼をなにか……の下に隠しているような」

「イギリス製の男仕立ての服の下つておっしゃりたいんじゃないやありません？」とケラーマン夫人が言った。

「べつにそんなつもりは。それよりは、男っぽく見せかけて仕立てた服の下といったほうが」

「どこが違うのかしら！」とわたしはつぶやいた。

「それで」エルザが進歩的なご夫人にあこがれのまなざしを向けて言った。「あなたにとつてどういう人が理想の女性なんですか？」

「すべてを包み込む愛の化身のような人ですよ」

「でもね、教授夫人」ケラーマン夫人が異議を唱えた。「近頃では、女が家庭の中で愛を与える機会なんてめつたにないじゃありませんか。夫は一日じゅう仕事で家にいないし、たとえ家に帰つても寝るだけですよ　子供にしたつて、尽くしてやるうにも、さつさと親元を離れて大学へ行つてしまつんですからね」

「愛は尽くすとか尽くさないの問題ではないんです」進歩的なご夫人が言った。「愛とは心の中にある光のことです。高い所から低い所まで　すべてを照らすことのできる穏やかな光のことですわ」

「暗黒のアフリカまでも」わたしは茶化すように小声で言った。

進歩的なご夫人には聞こえていなかった。

「女として　これまでわたしたちが犯してきた過ちは」進歩的なご夫人は続けた。「与えるという女の才能が、世の中のためにあるという事に気づかなかったことです。わたしたちはこの世のために喜んで犠牲にならなくては」

「まあ！」エルザは有頂天になり、たちまち女の才能を発揮し始めた　「ええ、よくわかります！　わたしだってフリッツと婚約してからというもの、すべての人に分け与えたい、すべてのものを分かちあいたいと思うようになりましたもの。」

「そんなの危険だわ！」とわたしは言った。

「それは危険の持つ美しさ、というか、美しいものが持つ危険にすぎませんよ」と進歩的なご夫人が言った　「これでわたしは書こうとしていることがお分かりになったでしょ　つまり、女は与えるために存在しているということなんです」

わたしはにっこり微笑んで言った。「じつは、わたしも本を書こうと思っっているんです。娘の育て方についての本ですわ。散歩に連れてゆき、キッチンには近づけないようにと書いたらどうかしら」

男たちはこちらのただならぬ雰囲気を感じとったのか、歌うのをやめていた。わたしたちがそろって森を抜けると、眼下にシュリーゲンが広がっていた。周りをぐるりと丘に囲まれ、白い家々が陽の光に照り輝いていた。エルカルト氏の言う通り「鳥の巢の中の卵」のようだった。シュリーゲンへ下りたわたし達は、ゴールデン・スタッグという宿で、サワームルクと新鮮なクリームを添えたパンを注文した。

ゴールデン・スタッグは居心地のいい宿だった。テーブルはバラの咲いている庭にうつらえてあり、庭では雄鶏や雌鳥が気ままに動き回っていた　ときたま人のいないテーブルに飛び乗っては、テーブルクロス赤い格子をくちばしでつついていた。わたしたちはパンをちぎってボールに入れ、クリームを加えて木製のスプーンでぐるぐるとかき回した。宿の主人とおかみはそばに立っていた。

「申し分のない天気ですな」エルカルト氏がスプーンを振りながら、宿の主人に向かって言った。宿の主人は肩をすくめただけだった。

「なんと！あんたはこの天気を申し分ないとは思わんのかね！」

「どうとでも」宿の主人はあからさまにわたし達を軽蔑していた。

「歩くのは気持ちのいいものね」エルザは、これ以上ないほどの笑顔を惜しみなく振りまいて、おかみさんに言った。

「あたしや散歩はしないですよ」おかみさんが答えた。「ミンデルバウに行くときにや、この人が荷馬車に乗っけてってくれますし　なにもわざわざほこりを上げて歩かなくたって、この足にはやってもらわなきゃなんないことがいくらだってあるもんですからね！」

「ばくはこついった人たちが大好きなんですよ」とランゲン氏がわたしに言った。「こ

の人たちがすっかり気にいりました。ひと夏ここに部屋を借りてもいいくらいだ」「どうして?」

「この人たちが大地に寄り添って生きているからですよ。そつでなければ自然を蔑むようなことは言えませんからね」

ランゲン氏はサワームルクの入ったボールを押しやり、タバコに火をつけた。食べおわってしまつと、七キロ半というミンテルバウムまでの道のりが、永遠に思えるほど長くわたし達の前に横たわっていた。カールははちきれそうなお腹をもてあまし、地面に寝ころんで皮のベルトを外した。

その時、エルザがフリッツにもたれかかってささやいた。フリッツはエルザの話を楽しみまで聞き、「僕を愛しているかい」とたずねると、立ち上がってちよつとした演説を始めた。

「ええー、僕たちは 僕たちの婚約を祝つて皆さんにある提案をしたいと思ひます 宿の主人の荷馬車に乗つて、ミンテルバウムまで戻ろつと思つのですが、皆さんご同意いただけますでしょうか」といつても 全員が乗れたら、の話ですけどー!」

「素晴らし提案よ!」ケラーマン夫人が言った。ほつとして息を吐いたとたん、服の留め金が二つ、音を立ててはじけ飛んだ。

「わたしからのささやかな贈り物です」エルザからそう言われ、二人分を平らげていた進歩的なご夫人は、泣きだしそんな顔で喜んでいた。

詰め込まれるようにしてわたし達が荷馬車に乗り込むと、宿の主人が手綱をとつた。宿の主人は、地面に向かつて何度も乱暴に吐き、わたし達の目の前で母なる大地を蔑んで見せた。荷馬車は音を立てて走り出した。ミンデルバウムが近付くにつれ、ミンデルバウムのこともお互いのことも、だんだん好きになつていくような気がした。

「こつう遠足をもつとしなければいけませんね」エルハルト氏がわたしに言った。「屋外の素朴な環境の中に身をゆだねていると、お互いのことがよくわかるものです 共に楽しむからこそ 友情がはぐくまれていくんですな。そういえば、お国のシエークスピアはなんて言つてましたっけ? ええーと、そう、こつうでした。『友達になり、離

したくないと思つたら、鉄の箍たがで自分の心に縛りつけておけ』とね」

「でも」わたしはエルハルト氏にひどく親しみを感じながら言った。「困つたことに、わたしの心は誰のことも縛りつけようとしません 縛り付けたら、たまらない重荷になつて、わたしの心はきつと押しつぶされてしまいます。わたしの心には箍のたの字もないようすわ」

エルハルト氏がわたしの膝にどすんとぶつかり、自分と荷馬車のことを詫言びた。

「奥さん、なにも文字通りに受けとることはないですよ。本当に箍で縛られていると思つている人なんかいません。箍というのは、人を愛する心のことですからね。たとえば、今日の午後のことを考えてごらん下さい。最初、わたしたちはどんな風でした

か？ みんなが さよう、まるで他人のようだったでしょ。でも、帰りはどうです？」

「荷馬車に乗ってる」とカールがわたしの代わりに答えてくれた。気分が悪いのか母親のひざに抱かれていた。

荷馬車は墓地を迂回し、来るときに歩いた野原にそって進んでいった。ランゲン氏が座席から身を乗り出して墓地に挨拶を送った。ランゲン氏は進歩的なご夫人のとなりに肩を抱かれるようにして 座っていた。その時、夫人がつぶやくのが聞こえた

「小さな男の子みたいに髪がなびいているわ」ランゲン氏はいくらかなごんだ表情で 過ぎていく墓地をながめていた。

夫人のささやきがまた聞こえた。「あなたはどつしてそんなに悲観的な。わたしにだって悲しいことはいくらでもあるのよ。でもね あなたがまだ若いから言うんだけれど 人生には楽しいことも たくさんあるのよ」

「あなたに僕の何がわかるっていうんです？」ランゲン氏が言った。

わたしは夫人のほうに身を乗り出してその手にそつと触れた。

「今日だって楽しかったじゃありませんか」わたしは探るように言った。「でも、あなたの女と愛についてのお考えは あの丘と同じくらい いえ、それよりもっと古くからあるものですよ」

道端から勝ち誇ったような叫び声があがった。やはり、あの老人だ 白いひげを生やし、絹のハンカチを手にまったく衰えを知らない。

「ほれ見る、やつぱり八キロだったろ」

「七キロ半だ」エルハルト氏が叫んだ。

「じゃあ、なぜ荷馬車で帰ってきたんだ！ 絶対に八キロだ！」

エルハルト氏は、ケラーマン夫人に膝をつかまえてもらつと、揺れる荷馬車の上に立ち上がり、両手をメガホンのようにして口にあてがった。「七キロ半だ！」

「間違いをほっておいてはいけません！」とわたしは進歩的なご夫人に言った。